

■（６６）嫌われる末尾の「体言止め」と「開かれる」

新人記者は記事を書く時、「体言止め」を多く使いたがる。確かに、文章のリズムがよくなると思えることもある。新聞は１ページの文字数が限られている。紙面に原稿を収めるため、例えば、「主張した」と書いた後、やむを得ず「主張」で止めて、２文字減らすこともある。２０数年前の自分もそうだった。そして先輩記者から注意を受けた。

文脈から意味を取り違えることはないだろうが、極端に言えば、「主張した」のか「主張しなかった」のかがあいまいになるというのが理由だ。文章力を鍛えるためにも、できるだけ体言止めを避けて、同じ文字数におさめる工夫をしろ、という助言だった。

同じように、「禁じ手」とされたのは、末尾の「開かれた」との言い回しだった。「会議が開かれた」「運動会が開かれた」。多くの場面で使える便利な表現だ。これだと「何がニュースか伝わらない」と注意された。「会議が紛糾した」とか「運動会に地域の人らも参加した」のようにニュースをはっきりさせようと指導された。そして極力、避けてきた。

ふと気になって２０日の「天声人語」を点検してみた。さすがに見当たらなかった（山）